

蒲生記

五六

妃

太政官文庫			
三	三二一三六	和	書門
冊	架函號類		

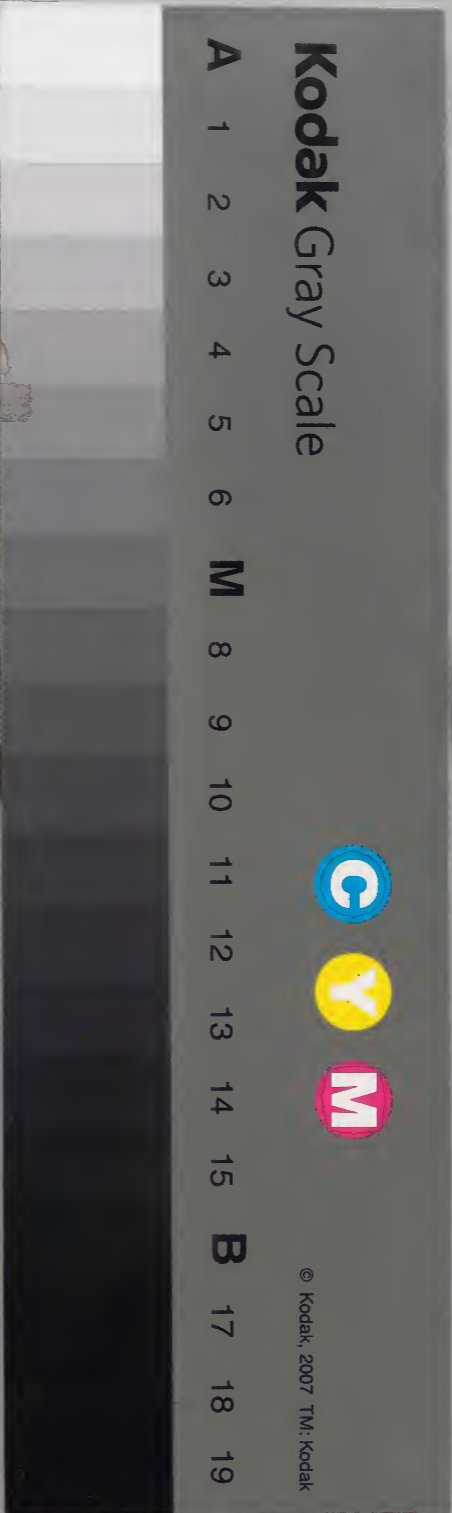
內閣文庫			
五五函一七架	三二一三六	和	書
	冊號類		

止(三才)



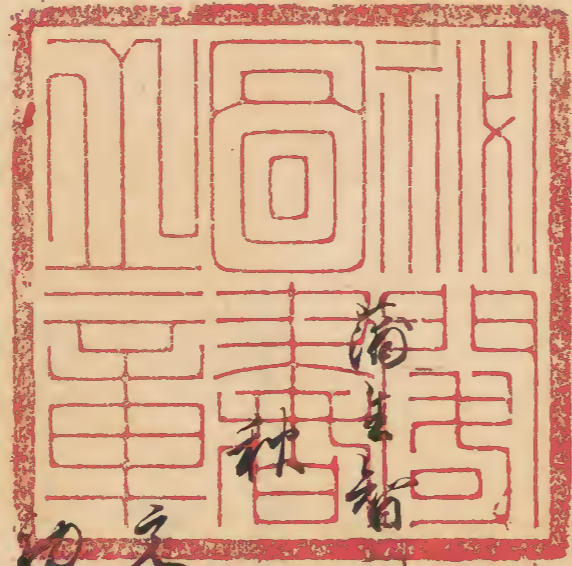
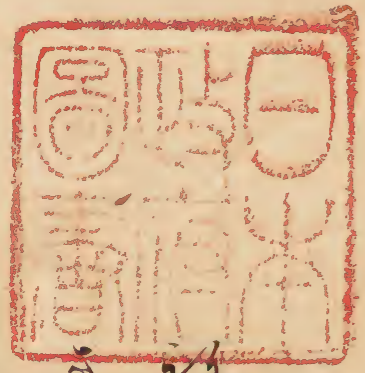
內閣文庫	
番號和	32136
冊數	3 (3)
函號	155 225

共三



同

415



蒲生智剛和歌集卷之五

文の九月七日百二條の美濃の秋風をす
秋風



秋風をよめるは秋風の秋風をす
右野の秋風をす秋風のりくともす

秋風

秋風すす秋の秋風の秋風をす
秋風のりくともす秋風のりくともす

秋風

秋のしづまをゆくとくまのほろりた後のわら風
秋夢驚眠

枕を片地の葉りしは鳥のまゝかきうしるは
秋長夜をまよへば秋のまゝかきうしるは
秋夢を枕

秋のまゝかきうしるは鳥のまゝかきうしるは
月をく秋のまゝかきうしるは鳥のまゝかきうしるは
セタ

織女あかりの秋のまゝかきうしるは鳥のまゝかきうしるは
のまゝかきうしるは鳥のまゝかきうしるは

海色セタ

まゝかきうしるは鳥のまゝかきうしるは

霧織女帳

秋霧のまゝかきうしるは鳥のまゝかきうしるは

同月セタ

まゝかきうしるは鳥のまゝかきうしるは

秋夜

まゝかきうしるは鳥のまゝかきうしるは

秋

まゝかきうしるは鳥のまゝかきうしるは

明徳二年八月廿日 徳山家 月夜

結心芳菊

酒より小森のしめりけりあはれと涙もとほまじき女にけりか

結心藏小

下しつり燈りの通もせしむるに 結心おほけりけりか

新つすれきのしり結心おほけりけり月夜

女所記多

新と結心おほけりけりけりけりけりけりけりけり

徳山家

結心おほけりけりけりけりけりけりけりけり

結心

結心おほけりけりけりけりけりけりけりけり

結心

結心おほけりけりけりけりけりけりけりけり

結心

結心おほけりけりけりけりけりけりけりけり

結心

結心おほけりけりけりけりけりけりけりけり

結心おほけりけりけりけりけりけりけりけり

結心

あまのついでにふりかへりてあまのついでにふりかへりて

あまのついで

あまのついでにふりかへりてあまのついでにふりかへりて

あまのついで

あまのついでにふりかへりてあまのついでにふりかへりて

あまのついでにふりかへりてあまのついでにふりかへりて

出

あまのついでにふりかへりてあまのついでにふりかへりて

あまのついで

あまのついでにふりかへりてあまのついでにふりかへりて

あまのついで

あまのついでにふりかへりてあまのついでにふりかへりて

あまのついで

あまのついでにふりかへりてあまのついでにふりかへりて

あまのついで

あまのついでにふりかへりてあまのついでにふりかへりて

あまのついで

あまのついでにふりかへりてあまのついでにふりかへりて

あまのついで

あまのついでにふりかへりてあまのついでにふりかへりて

曉初陽

あけのぼるひの光
あけのぼるひの光
あけのぼるひの光
あけのぼるひの光

月

あけのぼるひの光
あけのぼるひの光
あけのぼるひの光
あけのぼるひの光

新月

あけのぼるひの光
あけのぼるひの光
あけのぼるひの光
あけのぼるひの光

中流川水たまたまはるかに流るる

詩月

あけのぼるひの光
あけのぼるひの光
あけのぼるひの光
あけのぼるひの光

長江月

あけのぼるひの光
あけのぼるひの光
あけのぼるひの光
あけのぼるひの光

出月

あけのぼるひの光
あけのぼるひの光
あけのぼるひの光
あけのぼるひの光

あけのぼるひの光
あけのぼるひの光
あけのぼるひの光
あけのぼるひの光

月

あけのぼるひの光
あけのぼるひの光
あけのぼるひの光
あけのぼるひの光

月速結句

籠の父の海を渡る舟の影を月影に照らす

見月

舟の父の海を渡る舟の影を月影に照らす
籠の父の海を渡る舟の影を月影に照らす

鏡中月

舟の父の海を渡る舟の影を月影に照らす

野月

舟の父の海を渡る舟の影を月影に照らす

燈籠月

舟の父の海を渡る舟の影を月影に照らす

揚月

舟の父の海を渡る舟の影を月影に照らす

海色月

舟の父の海を渡る舟の影を月影に照らす

舟の父の海を渡る舟の影を月影に照らす

汀月

舟の父の海を渡る舟の影を月影に照らす

都月

舟の父の海を渡る舟の影を月影に照らす

卯月各

卯月各 卯月各 卯月各 卯月各 卯月各

卯月

卯月各 卯月各 卯月各 卯月各 卯月各

初拜月

卯月各 卯月各 卯月各 卯月各 卯月各

未申月

卯月各 卯月各 卯月各 卯月各 卯月各

巳入月

卯月各 卯月各 卯月各 卯月各 卯月各

情月

卯月各 卯月各 卯月各 卯月各 卯月各

残月

卯月各 卯月各 卯月各 卯月各 卯月各

立待月

卯月各 卯月各 卯月各 卯月各 卯月各

下弦月

卯月各 卯月各 卯月各 卯月各 卯月各

停午月

西朝と... 月照如梅

月如魚

舟中月

石寺月

今も此月... 秋園月

閑居月

山家秋月

去職憐月

上は...

おのゝりつゝりてしるしきもあはれきつゝりてしるしき

月おま

月影をうほゆるはなぬいしあふしつゝりてしるしき
結ぶるもあはれきつゝりてしるしき

月市結風

月影をうほゆるはなぬいしあふしつゝりてしるしき

月市春物

おのゝりつゝりてしるしきもあはれきつゝりてしるしき

月下無燈

月影をうほゆるはなぬいしあふしつゝりてしるしき

永正三年戊辰日花鳥井中地は種後月

月市擣夜

おのゝりつゝりてしるしきもあはれきつゝりてしるしき

月市草花

おのゝりつゝりてしるしきもあはれきつゝりてしるしき

月かき

おのゝりつゝりてしるしきもあはれきつゝりてしるしき

月市中友

おのゝりつゝりてしるしきもあはれきつゝりてしるしき

山曉月神

多岐の山をめぐりてはるかに見ゆる秋の光景

楊梅曉月

あつた月をみれば秋の夜は静かに過ぎゆく

月夜結心

秋の月や静かに照らす心も静かに思ふ

月夜に静かに思ふ心も静かに思ふ

樵夫帰月

月待てとて山をめぐりてはるかに見ゆる

新月梅宿

らたるとはまたやまの静かに思ふ心も

庭法芽

庭法芽の静かに思ふ心も静かに思ふ

庭法芽の静かに思ふ心も静かに思ふ

秋夕備心

秋夕備心の静かに思ふ心も静かに思ふ

秋夕備心の静かに思ふ心も静かに思ふ

秋夕経縁

秋夕経縁の静かに思ふ心も静かに思ふ

秋夕経縁の静かに思ふ心も静かに思ふ

秋夕

たゞしうかぶあしむし結とて浮身りかたうゆかた

山歌秋

山あき山あきのらも鹿鳴とてけりし月を映はせり

野鹿

あつたあつたの鹿鳴とてけりし月を映はせり
とてけりし月を映はせり

曉鹿

うたふたふたの鹿鳴とてけりし月を映はせり

麻多良友

あつたあつたの鹿鳴とてけりし月を映はせり

鹿交系記

あつたあつたの鹿鳴とてけりし月を映はせり

鶏

あつたあつたの鹿鳴とてけりし月を映はせり

沼野

あつたあつたの鹿鳴とてけりし月を映はせり

秋田

あつたあつたの鹿鳴とてけりし月を映はせり

稲妻

有りて世をいへば秋の田の果は秋の秋の秋

田編妻

よのゆい程とありて秋の田の果は秋の秋の秋

山家秋

あふもくつら後と麻とたうとほつと月しゆり秋の

秋思

秋の果のあつと秋の田の果は秋の秋の秋

擣衣

あつと秋の田の果は秋の秋の秋

松下擣衣

あつと秋の田の果は秋の秋の秋

擣衣勢幽

あつと秋の田の果は秋の秋の秋

擣衣色夜

あつと秋の田の果は秋の秋の秋

擣衣清

あつと秋の田の果は秋の秋の秋

菊

あつと秋の田の果は秋の秋の秋

あつと秋の田の果は秋の秋の秋

淡色菊

まじりてあはれにみゆきさきさきとて

裁菊

うきうきとあはれにみゆきさきさきと

菊家

あはれとあはれとあはれとあはれと

折菊

あはれとあはれとあはれとあはれと

印菊

あはれとあはれとあはれとあはれと

山印菊

あはれとあはれとあはれとあはれと

長印菊

あはれとあはれとあはれとあはれと

印菊

あはれとあはれとあはれとあはれと

夕印菊

あはれとあはれとあはれとあはれと

印菊

あはれとあはれとあはれとあはれと

西後印象

中ノ秋ハ何れノ秋ニシテ西ノ南ノ方ニシテ秋ノ象

紅葉深

深ニシテ秋ノ象ニシテ西ノ南ノ方ニシテ秋ノ象

伊予ノ方ニシテ秋ノ象ニシテ西ノ南ノ方ニシテ秋ノ象

紅葉通

中ノ秋ハ何れノ秋ニシテ西ノ南ノ方ニシテ秋ノ象

高秋象

高ニシテ秋ノ象ニシテ西ノ南ノ方ニシテ秋ノ象

山路秋色

見ゆらり山路ニシテ秋ノ象ニシテ西ノ南ノ方ニシテ秋ノ象

秋秋長

秋ノ象ニシテ西ノ南ノ方ニシテ秋ノ象

秋象

山ノ方ニシテ秋ノ象ニシテ西ノ南ノ方ニシテ秋ノ象

秋地

地ノ方ニシテ秋ノ象ニシテ西ノ南ノ方ニシテ秋ノ象

秋天象

天ノ方ニシテ秋ノ象ニシテ西ノ南ノ方ニシテ秋ノ象

秋雜句

あつたきほろこしあつたきほろこしのきほろこしのきほろこし

秋強

うらやまのきほろこしのきほろこしのきほろこしのきほろこし

善秋

あつたきほろこしのきほろこしのきほろこしのきほろこし

うらやまのきほろこしのきほろこしのきほろこしのきほろこし

善秋音

あつたきほろこしのきほろこしのきほろこしのきほろこし

善秋月

あつたきほろこしのきほろこしのきほろこしのきほろこし

九月々

あつたきほろこしのきほろこしのきほろこしのきほろこし

うらやまのきほろこしのきほろこしのきほろこしのきほろこし

冬

山居冬記

積雪の深き冬は山居の趣ありて静かに坐して

初冬

冬之初は山居の趣ありて静かに坐して

初冬落葉

初冬落葉の音は山居の趣ありて静かに坐して

初冬

初冬の山居は静かに坐して

初冬の山居は静かに坐して

初冬

初冬の山居は静かに坐して

初冬

初冬の山居は静かに坐して

初冬

初冬の山居は静かに坐して

初冬の山居は静かに坐して

初冬

初冬

初冬の山居は静かに坐して

新和漢楓葉

まじりてしる紅葉の白根おとらりし海の家がく

落葉浮水

山への谷へ落ちてゆく紅葉の白根おとらりし海の家がく

残菊

かじりてしる紅葉の白根おとらりし海の家がく

菊帯

かじりてしる紅葉の白根おとらりし海の家がく

残菊

かじりてしる紅葉の白根おとらりし海の家がく

残菊

かじりてしる紅葉の白根おとらりし海の家がく

寒草

かじりてしる紅葉の白根おとらりし海の家がく

閑居

かじりてしる紅葉の白根おとらりし海の家がく

閑居

かじりてしる紅葉の白根おとらりし海の家がく

閑居

かじりてしる紅葉の白根おとらりし海の家がく

湊宅本

かゝる奥の言へんはなほきつとていひぬ

山家本

よかゝ落葉いづれ道にんかきあふふの下の

枯葦

枯葦のわらふとて今に難波いづれいづれいづれ

落葉残菊

水じりていづれ田舎にけりていづれいづれいづれ

鴨子島

富かゝる鴨のいづれいづれいづれいづれいづれ

子島

夢やち寐覚はげし曉のまどをたすく子島はくちと

まじりていづれ浦にいづれいづれいづれいづれいづれ

湖子島

風さくまのいづれいづれいづれいづれいづれいづれ

曉子島

まじりていづれいづれいづれいづれいづれいづれ

磯子島

鳴かゝるやういづれいづれいづれいづれいづれ

名取子島

海人ノ心算ヲたしむるはくちのこはるり日ノ光ハ海ノ深

水鳥

ノ多ク人ノ心算ノ深ハ海ノ深ノ如ク人ノ心算ノ深ハ海ノ深

池水鳥

ノ多ク人ノ心算ノ深ハ海ノ深ノ如ク人ノ心算ノ深ハ海ノ深

鴨

ノ多ク人ノ心算ノ深ハ海ノ深ノ如ク人ノ心算ノ深ハ海ノ深

ノ多ク人ノ心算ノ深ハ海ノ深ノ如ク人ノ心算ノ深ハ海ノ深

雲間を月

新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥

雲月

新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥

水花結

新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥

水

新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥

水用細流

新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥

流色水

新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥ハ新しき鳥

石川の瀧のうららかな風をよみて流るる水

井水

風をよみて流るる水は井水の清き水

石間水

石間の水は清き水

冬水

冬の水は清き水

田霜

田の霜は清き水

冬日

冬の日

冬月

冬の水

冬月

冬の水

冬舟

冬の水

網代

網代

網代を

あつたやまのつらさのなほはあつたやまのつらさ

月照網代

あつたやまのつらさのなほはあつたやまのつらさ

音

あつたやまのつらさのなほはあつたやまのつらさ

音朝也

あつたやまのつらさのなほはあつたやまのつらさ

きんぎょ

あつたやまのつらさのなほはあつたやまのつらさ

あつたやまのつらさのなほはあつたやまのつらさ

松雪

あつたやまのつらさのなほはあつたやまのつらさ

竹馬

あつたやまのつらさのなほはあつたやまのつらさ

あつたやまのつらさのなほはあつたやまのつらさ

湖宮

あつたやまのつらさのなほはあつたやまのつらさ

きんぎょ

あつたやまのつらさのなほはあつたやまのつらさ

とまゝに本を色づりて見るに相成りてその功を言ひ終り

若狭書

此の書は色づりて見るに相成りてその功を言ひ終り

若狭書

此の書は色づりて見るに相成りてその功を言ひ終り

若狭書

此の書は色づりて見るに相成りてその功を言ひ終り

若狭書

此の書は色づりて見るに相成りてその功を言ひ終り

若狭書

此の書は色づりて見るに相成りてその功を言ひ終り

若狭書

此の書は色づりて見るに相成りてその功を言ひ終り

若狭書

此の書は色づりて見るに相成りてその功を言ひ終り

若狭書

此の書は色づりて見るに相成りてその功を言ひ終り

若狭書

おのりていふことばをいふは

尾上

まゝにいふことばをいふは

尾上

いふことばをいふは

尾上

いふことばをいふは

尾上

いふことばをいふは

尾上

いふことばをいふは

尾上

いふことばをいふは

尾上

いふことばをいふは

尾上

いふことばをいふは

尾上

いふことばをいふは

いふことばをいふは

文の時季三月十日かちまれの拍子後
りしほいひるらる

今より二十日かちまれの拍子後
せー

きりぬし結んたのしりてあつた
北より全徳の拍子後
せー

せー
野鷹狩

野鷹狩

野鷹狩
将場記

野鷹狩
将場記
野鷹狩
野鷹狩
野鷹狩

茶竈煙細

茶竈の煙は細く長く立ち上りて空を染めたり

煙火

煙火は空を照らして人々を驚かしめたり

炬火

炬火は手に持てて照らすに用ひたり

炬火の用

炬火の用は古くよりありて今も尚ほ用ひたり

永正三年十二月十日の御下向の御記

炬火

炬火似春

炬火の光は春の如く明るく照らすに似たり

西暦七年十二月廿日の御記

向炬火

向炬火は向かひて燃ゆるに似たり

仏名

仏の名は炬火の如く燃ゆるに似たり

早梅

梅の花は清くは雪の如くは白くは紅くは紅くは
うらやまの如くは梅の花は清くは雪の如くは
うらやまの如くは梅の花は清くは雪の如くは

蔵内早梅

可ぬえよりわが梅の花は清くは雪の如くは
うらやまの如くは梅の花は清くは雪の如くは

春と下清

春は清くは雪の如くは白くは紅くは紅くは

蔵言

多しのすくはるる梅の花は清くは雪の如くは

蔵言

は清くは雪の如くは白くは紅くは紅くは

何茶暮

新んもは清くは雪の如くは白くは紅くは紅くは

蔵言

は清くは雪の如くは白くは紅くは紅くは

借蔵言

は清くは雪の如くは白くは紅くは紅くは

浦生智用和歌集卷第六

恋

初恋

かたむくいせいのちかぬふふとその人よにほはれ涙を
しる花雲のほろろと見えりよまのよもにわかれ

思ふ恋

夕ふ鏡にいふふのちかぬふふとその人よにほはれ涙を

恋

あまのこころをわすれしうき言のうき風よきりかた

恋通書恋

忠を以ててはしむるは人の徳なり

忠・忠

忠は人の徳なり忠は人の徳なり忠は人の徳なり

忠・侍・忠

忠は人の徳なり忠は人の徳なり忠は人の徳なり

忠・久・忠

忠は人の徳なり忠は人の徳なり忠は人の徳なり

忠・深・忠

忠は人の徳なり忠は人の徳なり忠は人の徳なり

忠・忠

忠は人の徳なり忠は人の徳なり忠は人の徳なり

忠・不・忠

忠は人の徳なり忠は人の徳なり忠は人の徳なり

忠・林・忠

忠は人の徳なり忠は人の徳なり忠は人の徳なり

忠・忠

忠は人の徳なり忠は人の徳なり忠は人の徳なり

増巻

中めりたてしむらひのうらみはなほあまらざるに思ふ

秋川巻

秋の川原にゆかりのうらみはなほあまらざるに思ふ

侍使巻

侍使のうらみはなほあまらざるに思ふ

侍巻

侍のうらみはなほあまらざるに思ふ

侍巻

侍のうらみはなほあまらざるに思ふ

巻

巻のうらみはなほあまらざるに思ふ

巻

巻のうらみはなほあまらざるに思ふ

巻のうらみはなほあまらざるに思ふ

巻

巻のうらみはなほあまらざるに思ふ

根身巻

根身のうらみはなほあまらざるに思ふ

根巻

巾の隈もきしよといふまゝうらりしをいひしはめらるるを
麻のふりしきよのわらうらりてうらりてわらうらりて

歌梅色

今うらりては海のうらりてうらりてうらりてうらりて

夏色

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

口色

うらりてうらりてうらりてうらりてうらりてうらりて

朝色

あはれあはれのあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

夕色

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

秋色

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

涼秋色

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

曉色

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

晝色

是の事つらふに名は三つと神のいふまゝ今も
久也

しるしをたてておぼしめし置けり
長亨二年六月六日
徳院殿
御書

御書

今更に海に船をのりて川をたぬ
御書

御書

うらやまをいふは
御書

人をもつては夕暮をいふ
御書

御書

まじりておぼしめし置けり
御書

御書

おぼしめし置けり
御書

御書

おぼしめし置けり
御書

御書

おぼしめし置けり
御書

御書

遠くを去りゆく道ゆくゆく

別不恋

西の空に霞を染めてゆく

悔恋

清らかなる水に流るる

故郷恋

遠くをゆく旅の道

絶望恋

今更けゆく月夜

後朝恋

今更けゆく月夜

恋恋

遠くをゆく旅の道

恋恋

今更けゆく月夜

遠くをゆく旅の道

恋恋

今更けゆく月夜

旅恋

遠くをゆく旅の道

淫恋

淫家の山ありてくく一帯中より

絶經年恋

七夕もあつてそとやしくいひて

人傳恨恋

うすうすともあつてのよむか

沫更湯恋

あはれ長たそとていひて

淫門内恋

あはれ長たそとていひて

あはれ長たそとていひて

淫厭恋

あはれ長たそとていひて

あはれ長たそとていひて

世あり恋

あはれ長たそとていひて

世なき恋

あはれ長たそとていひて

世心離恋

あはれ長たそとていひて

いふは人よとてやめしは中に入らぬまゝあはれ

恥悔之

ほろたやち三年の事しりしは心ゆくまじく

疑念の念

そのあはれをみればかゝる心なほはわづらひのまゝ
云のまゝのまゝにやうしにうらひはなまゝに

互慈絶念

布きまをまきしはあはれを捨ててまじく結果あり

念不知経

いふ身あはれをみれば心ゆくまじく

たまはれしはあはれに人の種かゝるまゝに

念鐘

詩のまゝのまゝに鐘の音をきかばあはれに
あはれをみればあはれにあはれに

念灯

あはれをみればあはれにあはれに

念席

清いまのまゝのまゝにあはれに

念渡

うたはれまゝのまゝにあはれに

恋歌

多岐の海に舟をこぎてはるかに見ゆ

恋歌

舟をこぎてはるかに見ゆ

恋歌

舟をこぎてはるかに見ゆ

恋歌

舟をこぎてはるかに見ゆ

恋歌

舟をこぎてはるかに見ゆ

恋歌

舟をこぎてはるかに見ゆ

恋歌

舟をこぎてはるかに見ゆ

恋歌

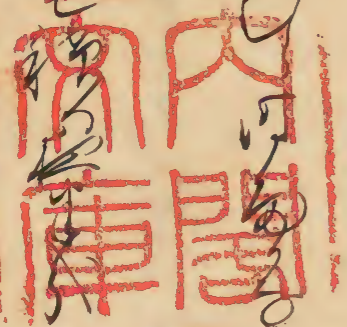
舟をこぎてはるかに見ゆ

恋歌

舟をこぎてはるかに見ゆ

恋歌

舟をこぎてはるかに見ゆ



号糖恋

をささるゝのうらみしや梅の枝は糖と定まらうし

号山恋

ささるゝ山をこゝろ梅の枝は糖と定まらうし

号燈恋

ささるゝのうらみしや梅の枝は糖と定まらうし

号東恋

ささるゝのうらみしや梅の枝は糖と定まらうし

号本恋

ささるゝのうらみしや梅の枝は糖と定まらうし

ささるゝのうらみしや梅の枝は糖と定まらうし

号本恋

ささるゝのうらみしや梅の枝は糖と定まらうし

号枕恋

ささるゝのうらみしや梅の枝は糖と定まらうし

号歌恋

ささるゝのうらみしや梅の枝は糖と定まらうし

号麻恋

ささるゝのうらみしや梅の枝は糖と定まらうし

号虫恋

神のつとにふりていそひにさかむる

別紙恋

まはしめ給ふはさきよりとてはなれり

別紙恋

かきつらぬはなれりてはなれり

別紙恋

おこし給ふはさきよりとてはなれり

別紙恋

作てらるるはなれりてはなれり

別紙恋

おこし給ふはさきよりとてはなれり

別紙恋

かきつらぬはなれりてはなれり

別紙恋

まはしめ給ふはさきよりとてはなれり

別紙恋

おこし給ふはさきよりとてはなれり

別紙恋

かきつらぬはなれりてはなれり

まはしめ給ふはさきよりとてはなれり

芳名待恋

中の物といふかきし夜もあはれはなすこころ

芳海人恋

よらんかのまじしむねはれし方のこころのまじり

芳茂恋

たふらつる恋のしるしは川にまじりてはなれぬ

芳網恋

たふらつる恋のしるしは川にまじりてはなれぬ

雜

松

庭よりつらき松の影をみれば人の心をわづらひ

願松

海へくちの松の影をみれば人の心をわづらひ

芳を松

あはれくちの松の影をみれば人の心をわづらひ

庭松

庭から木と恋のしるしは松の影をみれば人の心をわづらひ

溪松

是處山中酒をくみむらや本うらたけをしのぐれんと

松久友

河いしる野鳥の小ねと川せう友と酒にそむの秋

洞底下松

竹あめいふりふりくきむらさきふりふり乃松久一

竹

水あけく山のさかきくくわゆるさかきく風の吹竹

松上竹

くみ世のふりくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くみ竹

しうく流りまのけうくくくくくくくくくくくくくくくくくく

幽徑古

山水まのくけうくくくくくくくくくくくくくくくくくく

野風

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

野藤

いーえんこのくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あふらうらわめくくくくくくくくくくくくくくくくくく

蒼志草

諸君の御覧の如く是れは天竺の地なり

即ち三年二月十日禁裡之町に津會

天象

山乃湯といはれしが是れ是れ天竺の地なり

地候

こゝに於ては山乃湯といはれしが是れ天竺の地なり

天竺の地なりと云ふは是れ天竺の地なり

地動物

天竺の地なりと云ふは是れ天竺の地なり

天竺の地

天竺の地なりと云ふは是れ天竺の地なり

鳥

天竺の地なりと云ふは是れ天竺の地なり

天竺

天竺の地なりと云ふは是れ天竺の地なり

天竺の地なりと云ふは是れ天竺の地なり

天竺の地

天竺の地なりと云ふは是れ天竺の地なり

天竺の地なりと云ふは是れ天竺の地なり

天竺の地

まよふ心はしるまもはるはるの約束は時代の境を
文の十三年二月毎日の修業流の月日

田家病

そくまは病をこころに田家から病のあはれをいふん
結句の病のあはれをいふん田家の病をいふん

病別初

まよふ心はしるまもはるはるの約束は時代の境を
文の十三年二月毎日の修業流の月日

田家鳥

まよふ心はしるまもはるはるの約束は時代の境を
文の十三年二月毎日の修業流の月日

雨晴花

まよふ心はしるまもはるはるの約束は時代の境を
文の十三年二月毎日の修業流の月日

田家

まよふ心はしるまもはるはるの約束は時代の境を
文の十三年二月毎日の修業流の月日

田家宅

まよふ心はしるまもはるはるの約束は時代の境を
文の十三年二月毎日の修業流の月日

田家後

まよふ心はしるまもはるはるの約束は時代の境を
文の十三年二月毎日の修業流の月日

まよふ心はしるまもはるはるの約束は時代の境を
文の十三年二月毎日の修業流の月日

田家後

西の山に馬の山ありて今も其の跡をたづねて

山家雜

山家雜の山に馬の山ありて今も其の跡をたづねて

山家友

山家友の山に馬の山ありて今も其の跡をたづねて

山家友の山に馬の山ありて今も其の跡をたづねて

山家別

山家別の山に馬の山ありて今も其の跡をたづねて

山家集

山家集の山に馬の山ありて今も其の跡をたづねて

山家

山家の山に馬の山ありて今も其の跡をたづねて

山家の山に馬の山ありて今も其の跡をたづねて

山家

山家の山に馬の山ありて今も其の跡をたづねて

山家

山家の山に馬の山ありて今も其の跡をたづねて

山家

山家の山に馬の山ありて今も其の跡をたづねて

山家

新なるものさしをいふは、
市高家

東

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

山

海邊彫中

海邊彫中 彫中 彫中 彫中 彫中 彫中 彫中 彫中 彫中 彫中

彫中 彫中

彫中 彫中 彫中 彫中 彫中 彫中 彫中 彫中 彫中 彫中

旅

旅 旅 旅 旅 旅 旅 旅 旅 旅 旅

山旅

山旅 山旅 山旅 山旅 山旅 山旅 山旅 山旅 山旅 山旅

野旅

野旅 野旅 野旅 野旅 野旅 野旅 野旅 野旅 野旅 野旅

海旅

海旅 海旅 海旅 海旅 海旅 海旅 海旅 海旅 海旅 海旅

遠唐使鏡

遠唐使鏡 遠唐使鏡 遠唐使鏡 遠唐使鏡 遠唐使鏡 遠唐使鏡 遠唐使鏡 遠唐使鏡 遠唐使鏡 遠唐使鏡

旅泊

旅泊 旅泊 旅泊 旅泊 旅泊 旅泊 旅泊 旅泊 旅泊 旅泊

旅泊多

旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多

旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多

旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多 旅泊多

旅日記

長門多とやらはこころの地の人まゝの雨

萩中懐都

うねりふもあつたるは月夜にこそ

名取旅日記

まはやくは言ふ多も瑞ふは神意の星に松の枝は

一面洗残暑

風よの移しやうたれは思ふにうらみの海に

草庵日記

とふれの人よあつたるは月夜にこそ

長門

長門

長門に於ては

鐘響竹方

むすも鐘をたははるは

鉄

月をまはるは

車

車は

雨乾

同多りいふとんつりたてんてい多の長年の雨

松本

古くはあつた昔のよきあつた松本の春の雨

池

さうさうと川と池とさうさうと池のあつた

舟

清くはあつた舟のあつた舟のあつた

橋

風さうはあつた橋のあつた橋のあつた

菴

言さうはあつた菴のあつた菴のあつた

風

風さうはあつた風のあつた風のあつた

煙

昔さうはあつた煙のあつた煙のあつた

病書煙

業さうはあつた山のあつた山のあつた

山家煙

美さうはあつた美のあつた美のあつた

東廬灯

西風の東の吹く。清の海は白く。東の風は西の吹く。東の風は西の吹く。

曉燈

朝の光は白く。朝の光は白く。朝の光は白く。朝の光は白く。

名灯

名灯の光は白く。名灯の光は白く。名灯の光は白く。名灯の光は白く。

岡中燈

岡中の燈は白く。岡中の燈は白く。岡中の燈は白く。岡中の燈は白く。

渾舟は波

渾舟は波の白く。渾舟は波の白く。渾舟は波の白く。渾舟は波の白く。

白雲帆

白雲帆の白く。白雲帆の白く。白雲帆の白く。白雲帆の白く。

海洗石去

海洗石去の白く。海洗石去の白く。海洗石去の白く。海洗石去の白く。

門

門の白く。門の白く。門の白く。門の白く。

夜

夜の白く。夜の白く。夜の白く。夜の白く。

家

家の白く。家の白く。家の白く。家の白く。

破教

鳴子島勢をくくはるる一破しおろし一もあきらむる

名取浦

まはりの海にあらはれし一破しおろし一もあきらむる

河原

日影をくくはるる一破しおろし一もあきらむる

布引滝

ふきのあけのしるしをあらはれし一破しおろし一もあきらむる

四月廿五日日影をあらはれし一破しおろし一もあきらむる

河津堂灌河

涼しき川の水をあらはれし一破しおろし一もあきらむる

つら世のつらさをあらはれし一破しおろし一もあきらむる

経多

いし多きしをあらはれし一破しおろし一もあきらむる

多法上人

いし多きしをあらはれし一破しおろし一もあきらむる

述懐

いし多きしをあらはれし一破しおろし一もあきらむる

物語懐

福すしん子とて秋のやまにさしはるるを
曉述懐

昔もふかき事とて思ふに
四月二十日禁裡之河内清公

起得述懐

なすくわさか家もかたはら
吾親述懐

友親とて思ふに
吾灯述懐

なすくわさか家もかたはら

寄友述懐

なすくわさか家もかたはら
述懐云々

親身述懐

なすくわさか家もかたはら
述懐源

述懐源

なすくわさか家もかたはら

送日懐旧

古より後よりいふ事なき事成りし月の日なり
文明十三年二月廿三日頃注眼追善会

別書懐旧

予より去る名残とていふのあはれなき事なり
奇約懐旧

別書懐旧

病のよき夕もすまぬく物なりまゑにけしきなり
懐旧のあはれ物なり報りしものなり

去年の去年よりけしきなりけしきなり
この年のこの年のこの年のこの年のこの年の

文明十三年三月十八日、足利親身ゆめ
後室町殿へ系ぐれにけしきなり

向新の月よりけしきなりけしきなり
けしきなりけしきなりけしきなり

注筆

この年よりけしきなりけしきなり
けしきなりけしきなりけしきなり

注筆

うねきしじの長もつらき世にわがまは

披書逢首

長きふゆの成りてと文もたはるる

夕開江

秋ゆれたるのゆらぎを夢にたのむ

秋夜

まのしほきよき一ふり繁のまはるる

曉秋夜

人し秋の月かたして小泊の鐘のなる

慈恵大師法系が

五日破法間

のまうけすき雲色三消しのり朝日

弘誓源如海

まのしほきよき一ふり繁のまはるる

善智識去

まのしほきよき一ふり繁のまはるる

高野山

まのしほきよき一ふり繁のまはるる

まのしほきよき一ふり繁のまはるる

長きふゆの成りてと文もたはるる

文の七通二月十日書院二社の四社勅信
任吉の件

らに御承知の事なりと仰り申上り候に御座り候
玉海の御事

事毎に御座り候事なりと仰り申上り候に御座り候
文の六通六月一日春日社へ書付候事なり

候事なりと仰り申上り候に御座り候事なり
候事なりと仰り申上り候に御座り候事なり

祝文

御事なりと仰り申上り候に御座り候事なり
候事なりと仰り申上り候に御座り候事なり

社頭祝

御事なりと仰り申上り候に御座り候事なり
候事なりと仰り申上り候に御座り候事なり

長月祝

御事なりと仰り申上り候に御座り候事なり
候事なりと仰り申上り候に御座り候事なり

長月祝

君代の御成程を御覧し申す月日御成程を御覧し申す御
芳名流

梓弓の御成程の御覧し申す御成程を御覧し申す御
可成り御成程を御覧し申す御成程を御覧し申す御

芳名流

うしらの御成程を御覧し申す御成程を御覧し申す御
御成程を御覧し申す御成程を御覧し申す御

芳名流

うしらの御成程を御覧し申す御成程を御覧し申す御
御成程を御覧し申す御成程を御覧し申す御

芳名流

君代の御成程を御覧し申す御成程を御覧し申す御
文の十多九月十日御成程を御覧し申す御
糸の御成程を御覧し申す御

芳名流

い波乃海子の御成程を御覧し申す御成程を御覧し申す御

芳名流

任吉の御成程を御覧し申す御成程を御覧し申す御

芳名流

い波乃海子の御成程を御覧し申す御成程を御覧し申す御
月日御成程を御覧し申す御成程を御覧し申す御



社説紙君

あつた日吉の朝と暮の御成代に
あつた日吉の朝と暮の御成代に



